

個と協働の学びが響き合う授業の創造

～多様な考えを生かす学習サイクルを通して～

1 主題・副主題について

(1) 「個の学び」とは

課題（事象）に対する個人の学習経験や生活経験をふまえた自身の考えを顕在化し、それに基づいて情報収集したり、見通しを立てたりしながら、主体的に問題解決を図ることである。

答申において、「個別最適な学び」は、「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念であると示されている。

そこで、本研究では、生徒一人一人の特性や学習進度、学習の到達速度等に応じ、指導方法や教材等を柔軟に提供・設定するといった「指導の個別化」の中で、生徒が課題（事象）に対する個人の学習経験や生活経験をふまえた自身の考えを顕在化し、それに基づいて情報収集したり、見通しを立てたりしながら、主体的に問題解決を図ることを「個の学び」ととらえる。「個の学び」を充実するには、生徒一人一人の理解の程度や特性等に応じた指導方法や教材等を、ICT機器などの様々な道具を駆使して、提供・設定することが重要である。

(2) 「協働の学び」とは

課題（事象）に対する自他の考えを尊重し、他者と関わり合うことで、これまでと異なる情報を収集したり、見直しを見直したりして、問題解決を図ることである。

答申において、「協働的な学び」は、探究的な学習や体験活動などを通じ、多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成することとしている。

そこで、本研究では、課題（事象）に対する自他の考えを尊重することで、これまでと異なる情報を収集したり、解決の見直しを見直したりして、他者と関わり合いながら問題解決を図ることを「協働の学び」ととらえる。ここでの「自他の考えを尊重する」とは、他者の考えを価値あるものとして捉え、その価値を受け入れていくことを指す。

他者からどう学ぶか、他者どう学ぶかを通して、互いのものの見方や考え方、感じ方、知識や技能を広げたり、高めたりしながら、今まで気付かなかったことに気付くことが期待できると考える。

(3) 「個と協働の学びが響き合う」とは

「個の学び」と「協働の学び」で得た気づきを比較・分析するなどして、自らの考えの良さを実感したり、他者の考えと自分の考えとを組み合わせたりしながら、自分の考えを言語化し、精緻化している状態のことである。さらに、これまでの自分の考えからの変容を実感している状態までを含むものとする。

答申においては、各教科等の特質に応じ、生徒の実情を踏まえながら、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが示されている。

そこで、本研究では、上述の「個の学び」と「協働の学び」で得た気づきを比較・分析するなどして、自らの考えの良さ気付いたり、他者の考えと自分の考えとを組み合わせたりしながら、自分の考えを言語化

し、精緻化する状態を目指す。ここでの言語化とは、言葉による表出だけではなく、運動表現や歌唱表現、造形表現等も含むものとする。ただし、目指す生徒像としては、これまでの自分の考えからの変容を実感している状態までを含むものとする。そして、これらの状態を「個と協働の学びが響き合う」ととらえる。

この「個と協働の学びが響き合う」授業を推進することで、生徒はものの見方・考え方を幅広く学び、人としての生き方を能動的に形成していくことができる。また、その過程で心豊かにたくましく、主体的・創造的に生きることのできる生徒の育成を目指すものである。生徒は獲得した知識・技能を活用して、自らの考えを振り返り、粘り強く、学習を進めていくことが期待できる。

(4) 「多様な考えを生かす」とは

学習経験や、これまでの生活経験、個々の感じ方、価値観などの違いから生まれる生徒の見方や考え方（＝多様な考え）を教師が意図的に取り出す等して深い学びを目指すことである。また、生徒は互いの考えを尊重し合っている状態を指す。

経済産業省は「多様な人材」を、「性別、年齢、人種や国籍、障がいの有無、性的思考、宗教・信条、価値観などの多様性だけでなく、キャリアや経験、働き方などの多様性も含む」としている。

また、平成28年の中教審答申でも、生徒一人一人の豊かな学びの実現に向けた課題として、「インクルーシブ教育システムの理念の推進に向けて、一人一人の子供たちが、障害の有無やその他の個々の違いを認め合いながら、共に学ぶことを追求することは、誰もが生き生きと活躍できる社会を形成していくこと」を挙げており、教室の中での多様性の保障がこれまで以上に求められている。

そこで、本研究では、生徒の学習経験や、これまでの生活経験、個々の感じ方、価値観などの違いから生まれる見方・考え方を教師が意図的に学習活動に取り込み、問題解決を図ることを「多様な考えを生かす」と捉える。

多文化や価値の多様化により、生徒も個々に多様な考えをもつようになってきていることから、今までは少数意見として置き去りにしていた多様な考えの豊かさを授業の中に取り入れ、協働で学び合うことで、学びの深まりや広がりにつながると考える。

(5) 「多様な考えを生かす学習サイクル」とは

教師が、生徒の多様な考えを生かす適切な場面を吟味し、「コンフリクト→内化1→外化（→内化2）→リフレクション」という段階の中で個と協働の学びが響き合わせ、深い学びを実現させるためのサイクルのことである。

松下(2019)は主体的・対話的で深い学びを実現するものとして、「コンフリクト→内化→外化→リフレクション」という学習サイクルを提案している。本研究では、この学習サイクルを活用するためには、生徒の考えを顕在化させていくことが有効であると考え。そこで、生徒の考えを顕在化させるためのICTの効果的な活用の在り方を提案する。

そこで、松下の提案する学習のサイクルを応用し、「コンフリクト→内化1→外化（→内化2）→リフレクション」という学習サイクルの中で、多様な考えを生かしていく【資料1】。学習内容や目的によっては、このサイクルを一時間内に限定するものではないが、本研究においては単元レベルでのサイクルは対象としない。

「コンフリクト」とは、課題に対する自分の考えの「ズレ」や「葛藤」、「対立」を促す導入の工夫である。これにより、生徒は提示された課題を切実感ある自分事の課題として捉え始めるようになる。

「内化1」とは、コンフリクトによって切実感ある自分事の課題の解決に必要な知識・技能を自らが獲得し、解決していく中で、課題に対して明確になってきた自分の考えを顕在化することである。

本研究では、このコンフリクトから内化1までを、「個の学び」として考える。

「外化」とは、内化1で顕在化した自分の考えと他者の考えとを、比較したり、関係づけたり、合意したりしながら、課題解決を図っていくことである。

本研究では、この「外化」を「協働の学び」として考える。

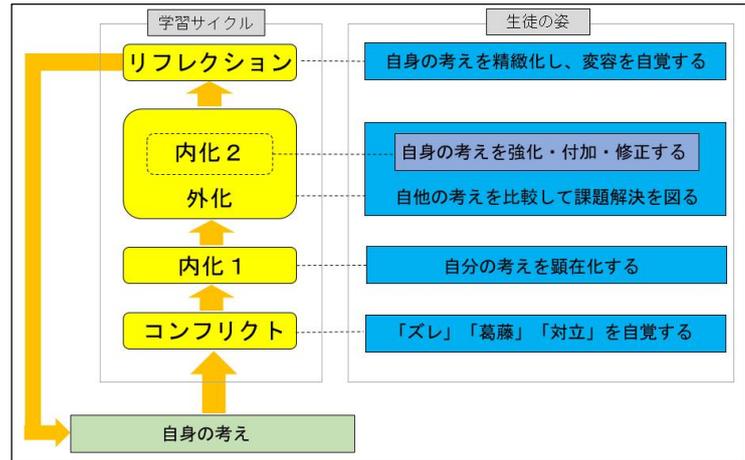
「内化2」とは、外化による課題解決を通して、自分の考えを強化したり、付加・修正したり、他者の考えを取り入れたりしながら、自分の考えをまとめることである。この内化2により、自分の考えが自身の中で言語化され、概ね整理できるようになる。

「リフレクション」とは、これまでの一連の学びを振り返り、獲得した知識やスキルのよさに気づき、次の学びにつなげることに加え、自己の変容を明確に自覚することである。

本研究では、この内化2からリフレクションまでを「個と協働の学びが響き合う」として考える。

この学習サイクルを通して、各教科の見方・考え方を働かせ、事象のより深い認識や、問題解決時の幅広い知識の活用等、深い学びの具現化を図ってきたい。

【資料1】本校が考える学習サイクルと生徒の姿の関連



中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（2021）

佐藤智子・高橋美能編著：『多様性が拓く学びのデザイン - 主体的・対話的に他者と学ぶ教養教育の理論と実践-』明石書店（2020）

伊井義人編著：『多様性を活かす教育を考える七つのヒント - オーストラリア・カナダ・イギリス・シンガポールの教育事例から -』共同文化社（2015）

東京学芸大学附属竹早中学校著：『「竹早」×「多様性」でえがく未来 - 多様性を理解する、活かす教育実践-』東洋館出版社（2022）

グループ・ディダクティカ編著：『深い学びを紡ぎだす～教科と子どもの視点から～』勁草書房（2019）